

諸橋轍次先生文化勲章受章祝賀會挨拶

| | |
|------|---|
| 著者 | 諸橋 轍次 |
| 著者別名 | MOROHASHI Tetsuji |
| 雑誌名 | 漢文學會々報 |
| 巻 | 25 |
| ページ | 1-5 |
| 発行年 | 1966-06-25 |
| URL | http://doi.org/10.15068/00148643 |

諸橋轍次先生文化勳章受賞祝賀會

一、日時 昭和四十年十一月二十六日（金）午後五時
一、場所 茗溪會館

主催 東京教育大學漢文學會

東京教育大學國語國文學會

財團法人 斯文會

東京高等師範學校附屬中學受業生



參會者二百五十餘名の盛會であつた。

〔挨拶〕

今回は、わたくしが受勳をいたしましたことにつきまして、かくも盛大な會をお催しくださいますして、ことに最初に宇野先生の乾杯のおことばをいただき、またかずかずのかたがたからまことにいたみいつたおことばをいただきまして、實に感激しておるしだいであります。厚く御禮申し上げます。

わたくしは、六十年間教育に従事し、漢學を通じてやっておつたということは事實でありますけれども、それ以外、實はほとんど何もしておりませんのでございます。實

際におきまして、大學などの講義をしておる、大學は學術の蘊奥をきわめるところであるといふのでありますから、その講義をするならば、何か新發見をするとか、あるいは新研究をするというようなことがなされなければならぬのであります。が、わたくし自身、そういう性格ではありませんので、まあ學校の先生をやつておる限り、何か受け持たなければならぬ、受け持つとすれば、こどもの時分から親しみのあつたものを作るより方法がない。こどもの時分から論語や孝經などの素讀を習つておりましたものですから、自然にそれをやつて、その學問も、どちらかと申しますれば、やはり儒教を主としたものをやつていく。しかもその儒教も、日本流のものがあるべきものだということを、こどもの時分に習ひましたものでありますから、そのとおりにただやつてきただけであります。今日、ちよつと皆さまのお顔を拜見しますると、漢文學界のかたがた、國文學界のかたがた、斯文會のかたがた、學問關係としてはそういうかたがたがおいでくださいます。が、ちよつとそれが、わたくしがこどもの時分に學んできたその方向のかたがたのお集まりになつておりますのであります。これは自分には、こどもの時分の環境が、こういうところにまた自然に集まつてきたのか、あるいはまた今日お集まりのかたがたのような先生、友人、あるいはあとから来てくださったかたがた、そういう集まりのものが、わたくしをこういうふうにしてくださったのか、なにかそんなような感じがいたしております。

教育方面につきましては、これもわたくし自身としては師範學校にはいりましたので、學校の先生をやることは當然のことです。ありますし、また元來が氣のきかない、早くくいえば融通のきかない、家内なぞよく申しますが、あなたは役に立つことはなんにも知らん人だ、などと言つておりますが(笑)、實際そのとおりで、役に立つことをなんにも知らないようなものでありますから、ほかの方にいく方法はないので、ただ學校の先生をやつておる。ところが、これまたまことに學生のかたがたには恵まれておりまして、卒直に申しますが、わたくしの人生でいちばん楽しかつたのは附屬中學の先生時代です(拍手)。これはまことに愉快であつたんです。それで、職務であるからやつておるといふ感じは少しも持つたことはない。義務であるからやつたといふことも考えたことはない。そうしてまた、ほんとうから言つて、教育するためにや

つておるとも考えない。ただ愉快であるからやつておるといふことであります。これは實際であります。そういうことでずつとやつてきましたので、學問の方からいひましても、また教育の方からいひましても、みずから計畫し、前途を考えて進んできたのではありませんので、ただほんとうの自然の流れの中に、自然にやつてきただけのことなんであります。

二、三日前に、ある友だちから、『一刀流の極意』という本をちようだいしました。笹森とかいう、前に大臣かなんかやつたことがあるんですかね、その人が著わしている。これはやはり伊藤一刀流の極意を傳えておる人らしいんですが、その人の友人から贈つてきましたので、さしあたり、せつかくもらつたんだから、五、六百ページの本でありますから見るわけにはいかないが、初めのところを見ようと思つて見ていましたところが、ふつと目についた書がある。それは、徳川家達公の書であります。話はよそにいきませんが、けつしてじようずな書ではないが、さすがにこれは十六代將軍でなければ書けないような書だと、今、徳川さんがおいでになります、徳川さんのご書はよく拜見しますが、ほんとうにそういう感じがした。その文句を見ましたところが「流露無碍」、流れる露、露の流れるようにして、少しも停滞しないようにという文句、なかなかおもしろい文句があるなと、わたくしの字引にあるかと思つて見たところが、ありませんでした(笑)。しかし、これはどういう意味だか、いつたいわたくしの字引にないようなことばはそうたいしたことばじやない(笑)。だんだんそんなことで引きつられまして、その本を讀むともなしに寝ころんで讀んでおる。約半分ぐらい拾い讀みでありますけれども讀んで見た。そうすると、一刀流の極意というものは、結局「流露無碍」露が流れてごくやわらかに、露はご承知のとおり水でありますから、四角でもないし三角でもない。自分では形を持たずに、ただ遭遇するところの境遇にあつて、そうして流れていく。剣道の極意はここだといふことを書いておる。そこで、ハハア、これはなるほどいいことを言つてくれた。いままでほんとうに、わたくし自身はだいたい「流露無碍」そういうと、たいへん極意をさつておるようであります、融通がきかないから、自然そうなつてきたのであります。しかし、そのあとにまた説明がついておつた。初歩の人間に一つ教えることがあるという。それは、大技を覺えよといふことであります。大きな技、大技

を覚えよということは何かというところ、これはごく簡単なもの、剣道をやるときには足をどういうふうにする、打つときにはどういう形で打つという、それだけのことなんです。それ以外のことは考えるなど、こういつておるんです。そうして、これが初歩だと。つまり「流露無碍」ということは、極意でもあるが、また初歩である。初歩のものは、初歩だけではいくものではないということ、最後に教えておつてくれました。いろいろ考えまして、どうもこれはよほどわたくしのことなどに教えておるんだと、わたくしは結局、人生の初歩だけをいままでやつてきておる。これからほんとうのところをやるべきはずであると思うが（拍手）ところが、その點はとても自分にはできないわけでありませう。

わたくしの今回の受賞については、もちろん大きなこの字引をやつたということも、たぶんお考えくださいつたことかと思つてありますが、これにつきましてはたびたび言つておりますが、わたくしの力というよりは、多数のかたがたの力であります。鈴木社長が財政的の困難に打ち勝つて、三十何年も一文も金のはいらぬ仕事をやつてくださる、こんなことちよつとできないことでもあります。また多数の諸君の協力がありました、ことにわたくしを直接助けてくださいます。たとえば近藤正治君、それから川又武君、これがみな亡くなつております。これは、編集のほうで助けてくれた人でもあります。それから、印刷のほうで、非常にこれは苦心しまして、以前は活字でやつたんでありますが、それをやつてくれた小林康麿君、それが全部焼けてしまひまして、これはどうにもならぬと思つておつたときに、助けてくださったのが石井茂吉君、これは寫眞植字の發明者であります。こういうような諸君の手柄であるのであります。今日は、わたくしは實は最初にこの敍動をいただきましたときに、自分の實際の力、自分の實際の成績というものに對しては、あまり過大のことで、ありがたない、もつたないという感じは非常に受けましたが、そううれいという感じは、實のところそんなに起きたことはなかつた。けれども、こうして今日皆さまのお集まりをいただきました、わたくしのために喜んでくださる、こういうかたがたがおいでになると、わたくしのために喜んでくださる皆さまの志に對しまして、ほんとうにうれしく、喜ばしい感じを得ております。そうして、先刻申しました、亡くなつた四君なども同席されたならば

非常に喜んでくださるであらうと、なんともお禮の申しようのないほどありがたく思い、またうれしく思っております。更に先刻は結構な目録をいただきまして、その點でもかきねてお禮を申し上げます。

なお、またこどもなどのご招待もいただきましたのでありますが、實は五人のこどもがいま東京に一人もおりませんので、そのうち長男、次男は、つい一週間ほど前に公用でまいりましたので、また來るといふことはできずに、まいりませんでした。ただ今日の喜び、皆さまのご誠意の點は、長く家族にも傳えておきたいと思ひます。

最後に、わたくし自身の今後のことではありますが、實はもうなにかやらなければならぬといふことは考えておりますけれども、なにぶん年をとつて、これから大いに奮發して、なぞといふことは、申し上げることはできませんので、ただ、いままでやつてきた、やはりこれも流るる露、少しでも從來學びましたものを、なるべくやさしくして、機會さえあれば大ぜいのかたがたにでもわかるようにして、少しでもお役に立つようにしたいと思います。先刻お手もとにさしあげましたのは、これはほんとうのつまらない本なんです（編集者注）『亂世に生きる中國人の知恵』、これも一つなであります。これは八章あります。少なくとも第一章、そこへ「中國の人々」といふ題目で書いてあります。それと、いちばんおしまい、結語のところへ二、三ページある、これだけはぜひひとつお讀みを願ひたいと思ひます（拍手）。というのは、中國はけつして戦争しちやならん國だといふこと、こんな國と戦争して、それほどばからしいことではないといふことを書いておるし、それから、いちばんおしまいのところには、中國人につきあうには、なんとしたつて、これはやつぱり手くだなどをやつたならば、日本は負けることにきまつておるから、眞正直にやつたらよからう。これだけは、まちがつておるかしたらんけれども、わたくしの信念でありまして、そういうことを書いております。今後そんなことをしていきたいと思つております。なんとしても皆々さまのご好意にお報いするわたくしの道は、今後健康になることがいちばんと思ひます。土屋博士は八十八までは大丈夫と言われたけれど、少し足りないように思ひますから（拍手）できたらもう少し、……今日はまことにありがたく思ひます。